



# 薩摩義士の切腹

## はじめに

皆さんは、宝暦治水と薩摩義士の物語をご存じでしょうか。建設史上では有名な話ですが、一般にはなじみが薄いかもありません。しかし、この話は明治初期の顕彰運動がきっかけで世に出ることとなり、赤穂浪士の仇討ちにもまさる悲劇、いや壮挙であるともはやされ、教科書にも取り上げられました。

さらに昭和37年(1962)に杉本苑子氏が、この話に取材した『孤愁の岸』で第48回直木賞を受賞し、より広く知られることとなりました。

その宝暦治水と薩摩義士の物語ですが、あらましをご紹介します。

## 宝暦治水と薩摩義士

濃尾平野を貫流する長良川、揖斐川、木曾川の3つの大河は、複雑に分流と合流を繰り返すため、付近は洪水の多発地帯となっていた。宝暦3年(1753)12月25日、幕府は薩摩藩にこの3つの川の治水工事を命じる。このように幕府から各大名に命じられる工事は「御手伝普請」と呼ばれ、拒絶することができな

## 切腹に違いない

そもそも切腹説の出所は、地元で伝わる口承によるものでした。それに加え、最初の犠牲者、永吉惣兵衛の埋葬証文が見つかり、「腰物(こし)のもの、刀のことと考えられている」にて怪我致し相果て候」と書かれていたことから、これは切腹であり幕府をはばかって、曖昧な表現になったと解釈されたのです。

また、薩摩藩士ではなく、なんと幕府の役人2名が切腹した記録が残っており、「幕府の役人ですら切腹したのだから薩摩藩士も切腹したに決まっている」と決めつけられました。

さらには、1年半にも満たない期間に80人以上が死んだのはおかしい、切腹に違いないという理屈も加わったようです。

ちなみに、永吉惣兵衛は音方貞淵と同日に刺し違えて死んだと紹介しましたが、これは音方の墓がある寺の住職のミスで、墓に刻まれた命日は1年も後の宝暦5年4月25日だと確認されています。宝暦治水の顕彰が華やかかなりし頃は、この2人の霊が宿った「慷慨松」があり、絵はがきにもなったようですが、いつの間にか消え去ったようです。

## 切腹じゃなければだめ？

もう一つ、工事の完了を待って切腹したとされる総奉行の平田靱負ですが、彼の場合は平田家に伝わる系図と、薩摩側の史料に「病死」と記録されています。2つの史料に「病死」とされているにも関わらず、「いや、それは幕府をはばかって」という妙な理屈で切腹になってしまっているのです。

それはどうしてなのか。なぜ、それほ

い軍役のつだった。そして、この地域とならん関係のない薩摩藩に白羽の矢が立ったのは、多額の費用を負担させることによつて弱体化をねらう幕府の卑劣な策略だった。薩摩藩は総奉行に平田靱負を選び、総勢940人以上の藩士が工事に赴くこととなった。

工事は翌4年2月27日に始まり、雪解け水で増水する夏場を避けて5月22日に中断。9月21日に再開し、翌5年3月28日に延べ約9か月を要して完工した。

しかし、工事は滞りなく進んだわけではなかった。なにせ、幕府の目的は治水もさることながら、薩摩を陥れることなのだ。工事の最中、薩摩藩士たちは、幕府の役人から度重なる嫌がらせと、妨害を受けた。

薩摩藩士の永吉惣兵衛と音方貞淵の2人は、幕府に対し悲憤慷慨し、宝暦4年4月14日、お互い刺し違えた。彼らの自刃を皮切りに、切腹するものが50名ほどにのぼり、しかも工費は膨れ上がる一方で、予算を大幅に超えて40万両にも達した。

ど切腹にこだわったのか。いや、なぜ、病死ではないのか。その理由を考察することこそが本稿の目的であり、これから述べていきたいと思います。

## 岩田徳蔵

まず、これまでの研究によつて、薩摩義士の物語を全国的に広めた人物として、自由民権運動家であり、社会教育家でもあった岩田徳蔵の名が上がっています。本誌2008年5月号「怨念で傾いた松本城」でもご紹介しましたが、こうした活動家が出張してくると、史実が捻じ曲げられ、大衆に受け入れられやすい物語に作り替えられるように思います。

さて、岩田は広報活動に乗り出すと、赤穂義士にちなんで薩摩義士の名を創出します。また、幕末における幕府と薩摩の対立を、宝暦治水物語に取り入れたのも彼の仕業だとされています。

大正5年(1916)9月に社会教育系の雑誌「人道」にて岩田は、赤穂義士は君主の恨みを晴らしたただけだが、薩摩義士は「平田靱負始め八十二名が屠腹した結果は音に其藩主をして無事ならしめたのみならず、水害地方の生霊を



岩田徳蔵らの顕彰活動によって、大正9年(1920)に鹿児島市城山の麓に建てられたピラミッドのような「薩摩義士碑」

工事がすべて終わり、幕府の検分も宝暦5年5月22日に終了すると、その3日後の25日、総奉行の平田靱負はすべての責任を負って、自らの腹に刀を突き立てた。

平田の死をはじめ、50名余りの薩摩藩士の切腹は、幕府をはばかって永遠に秘匿され、病死者を含め80名以上の犠牲を出したことは、長く世に知られることはなかった。



木曾三川公園の展望タワーから眺める国史跡・油島千本松総切堤。長良川と揖斐川を分離するため北側約1,000m、中央546mを空けて南側約364mの長い堤防が薩摩藩士によって造られた

## 不思議な話も...

私がこの話を初めて目にしたのは、もう20年近く前のことですが、不思議な

救った」から、赤穂義士より偉いんだと言いつつ、「是により大いに精神教育の実を表現して道義の衰退を快復するに望みあることを信じた」ので、社会教育のために広めたいと述べています。

ここで岩田は、死亡した薩摩藩士は総て切腹として、しかも、まるで彼等の死によつて洪水から地方が救われたといわんばかりです。

## 自決のススメ

一方、岩田の親玉ともいうべき自由民権運動主導者だった板垣退助は、岩田が大正5年に編んだ『薩摩義士殉節録』に、「武士道と自殺」という一文を寄稿しています。あの「板垣死すとも自由は死せず」で有名な板垣退助です。

その中で板垣は「人の病で将に死せんとするに方り、自殺して以て其醜態免るの理想を執行せん」とまでは言わないが、でもやはり「其の生の価値を失へる日に於て、潔く自決するに如かずとの理により、武士道の理想を示さん」と、病死するよりはいつそ自決したほうが良いと勧められています。

## 乃木大将の殉死

こうした論調は板垣だけではありませんが、例えば大正元年(1912)9月、明治天皇に殉じた乃木大将の死に寄せられた各界からの反応をみてみましょう。

仏教系の新仏教徒同志会が草した雑誌「新仏教」同年10月号には、旭山人という人物が「自殺は創造なり」という一文を寄せ、「疾病で死ぬる杯は己を得ぬことではあるが、吾人は此場合に完全な

話もあるもんだ...と首をひねってしまいました。「抗議のために切腹? 仮にそうだとしても秘密にされたら無駄死じゃ...それに、なぜ秘密の話が現代に伝わっているの?」

ちなみに、宝暦治水については、確かに幕命によつて薩摩藩士が工事に携わり、80名以上の犠牲者を出したことは史実とされていますが、50名以上の切腹者を出した記録はどこにもないのです。その代わりに、薩摩藩士の間で赤痢が流行し、半数近くが病氣となつて数十名の死者が出たという記録は残っています。

早稲田大学の創立者である大隈重信も、教育系雑誌「真人」同年11月号において「今日乃木將軍の死は国民に多大の感動を與へ、既に教化の上には余程の効果があるが、更に新聞雑誌が筆を揃へて、管公(乃木)当時のごとく一大示威運動を為したならば、世の中の怠けものに対して更に偉大な感動を與へるであらう」と、過激な発言をしています。

## おわりに

これまでも述べてきましたが、伝説や物語は、その時代、その地域で受け入れられない限り消え去る運命にあります。もちろん、紹介したような論調がすべてではありませんが、岩田が広報活動にいそしんだ時代は、日清・日露の戦争を経て、「潔い死」が美化される風潮にありました。つまり、薩摩義士の切腹がまかり通り、そして広まったのはこの時代の人々がそれを良しとしたからです。

しかし、乃木大将の死から30年ほど後、日本が仕掛けた無謀な戦争によつて、多くの命が失われました。各時代によつて、人々の価値観や善悪は変容していくものですが、同じ過ちを繰り返さぬよう、人の死を賛美するのではなく、彼らの命が今あることこそ、またとない奇跡であることを信じ、そして伝えていかなければならないのです。

(文: 江口知秀)



平田靱負を記る治水神社 (岐阜県海津市海津町油島)